様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：１１４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１７４３３

研究課題名（和文）がんになった父親における希望と困難の現状把握と多職種共同支援の開発

研究課題名（英文）Understanding of the current situation of hope and challenge in fathers who have a cancer and development of the cooperative support system by Inter-professional Work.

研究代表者
赤川　祐子（阿部祐子）（Akagawa, Yuko）

秋田大学・医学系研究科・助教

研究者番号：１０７７０１１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：　3年間の研究成果は、主に2点ある。がん治療中の親の希望と困難について、全国的な実態調査において具体的に把握されたこと、多職種共同支援の実施である。
　がん治療中の親のQOLやストレス対処能力は先行研究と比較し低く、特に父親は母親よりも低いことが明らかになり、親役割が担えないことが困難であった。一方では、子どもの存在や成長が希望となり、患者自身が感じる存在価値を高めていることも推察された。子育て中のがん患者は年々増加しており、治療と生活の両立が必要となる。がん治療中の親への支援では、希望に目を向けられるような対話が重要と明らかになり、今後の支援体制構築の一助となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、①がん治療中の父親の希望と困難について質問紙調査と聞き取り調査による実態調査・分析をし、②多職種共同支援の開発を行った。
　①では、がん治療中の親の困難とその対策だけでなく、希望への着目に学術的な独自性があったと考える。ポジティブな方向への働きかけは、がん治療に向かう親（患者）自身の力やその人らしさを支えるものにもなりうる。②多職種共同支援の開発は、支援体制構築の一歩として大きな成果と言える。

研究成果の概要（英文）：Firstly, we have understood specific hope and challenge for parents who are undergoing cancer therapy in the nationwide field survey. Secondly, we have reached an implementation of cooperative support by Inter-professional Work. Our results showed that the QOL and stress coping ability of parents undergoing cancer therapy were lower than those in the previous study. Especially, fathers' QOL and stress coping ability were lower than mothers' ones. Their challenge was that they were unable to play a role as parent. On the other hand, it was also presumed that child's existence and child development were their hope and enhanced the existence value that they feel.
Those patients are required to balance therapy with daily life. Parents undergoing cancer therapy need to look at hope in a dialogue and that dialogue is important to support parents. This is what we revealed in this study and will contribute to building of the future support system.

研究分野：臨床看護学

キーワード：がん看護　がん治療中の親

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

18 歳未満の子どもを持つ子育て中のがん患者は全国推計で約 5.6 万人、その子どもは推計 8.7 万人である[1)]。今後、がん罹患年齢の若年化や晩婚化により、子どもをもちがんに罹患する患者の人数は増加すると予測される。

がんと診断された親は、治療にまつわる心身の負担を背負い、子育てや子どもとの関わりについて、日々多くの困難に直面する。Semple ら[2)]による文献レビューでは、子育て中のがん患者は、子どもにどのようにがんを伝えるべきかと悩み、親として良い存在でいられないことに罪悪感を持ちながらも、子どもを守るために家庭での役割を果たそうと努力している。

先行研究では、子どもをもつがんの親の困難について焦点が当てられているものが多く、親の希望に注目した研究や、困難と希望に関わる要因や、困難と希望の具体的な内容を明らかにしているものは少ない。本研究は、がんになった親を支える部分を希望として捉えることで、支援体制の見直しや新たな構築の一助になると考えられる。

２．研究の目的

１）がん治療中の親の困難と希望、それらに関連する要因を明らかにする。
２）がん治療中の親が子どもとの関係において抱く困難と希望の具体的なエピソードを明らかにする。
３）がん治療中の父親への多職種共同支援の開発をする。

３．研究の方法

研究は、3 つの調査から成り立っている。なお、本研究の対象は父親であったが、調査は父親と母親の両方を対象に実施した。

１）がん治療中の親の困難と希望、それらに関連する要因を明らかにする。

全国がん診療連携拠点病院でがん治療中の親を対象に、横断的質問紙調査を行った。調査内容は、性別、家族構成、相談できる人の有無、疾患名、診断時期、治療、ストレス対処能力（SOC-13: Sense of coherence 13）、QOL（FACT-G: Functional Assessment of Cancer Therapy Scale General）、困難と希望は先行研究[3)]を基に各 13 項目を独自に作成した。分析は、属性の記述統計、困難と希望に関連する要因の視点で行った。

２）がん治療中の親が子どもとの関係において抱く困難と希望の具体的なエピソードを明らかにする。

上記１）の質問紙調査と同時に、聞き取り調査の依頼文書を同封し、研究協力依頼を募った。同意していただいた聞き取り調査参加者に対して、3 点①子どもがいることで困難を感じたこと、②希望を感じたこと、③困難と希望の間で心が揺れ動くようなエピソードはあったかを聞き取りした。分析は、データの逐語録を作成し、類似した内容をカテゴリー化した。

３）がん治療中の父親への多職種共同支援の開発をする。

上記１）２）の結果を統合し、がん治療中の親に対する多職種共同支援を開発し、実施した。

＜倫理的配慮＞

すべての研究過程において、秋田大学倫理審査委員会の承認を得た上で行った。また、研究１）では、研究同意を得た 11 施設のうち７施設において倫理審査を受け、承認を得た。

４．研究成果

１）がん治療中の親の困難と希望、それらに関連する要因を明らかにする（未発表データ）。

（1）がん治療中の親の属性について

全国がん診療連携拠点病院 11 施設に質問紙を 68 部配布し、54 部を回収した（回収率：79.4%）。有効回答率は 100%。性別は女性が多く 39 名（72%）、平均年齢±標準偏差は 39.3±5.3 歳であった。子どもの人数は 1 人が 28 名（52%）、2 人以上が 26 名（48%）、子どもの年齢は 9.0±4.5 歳であった。対象者の環境として、家族以外に相談者がいる者は 37 名（69%）、いない者は 17 名（31%）であった。疾患は乳がん 23 名（43%）、子宮がん 8 名（15%）、胃がん 7 名（13%）の順に多く、診断からの年数は 5 年以上が 34 名（63%）。病期はステージⅢが 29 名（54%）、治療は化学療法が 44 名（81%）と最多。

対象者の QOL（FACT-G）合計点の平均±標準偏差は、50.4±16.2 点であった。QOL 合計点と属性の比較をすると、男性の QOL は女性より有意に低く（p= 0.02）、診断からの年数は 5 年以上である者の QOL が有意に低かった（p= 0.003）。ストレス対処能力は、平均 46.7±10.4 点であった。対象者の属性ごとにストレス対処能力合計点を比較すると、性別では女性より男性が有意に低く（p= 0.04）、診断からの年数は 5 年以上の場合に有意に低かった（p= 0.006）。

（2）困難と希望について

困難の 13 項目中、「思う」群が 90%以上の割合のものは、＜自分の病気のためつらい思いを感じさせたくない（96%）＞、＜子どもが気持ちのつらさを感じるかもしれないと思った（92%）＞であった。一部の項目において、属性は性別、相談者の有無に有意な関係がみられた。

希望の程度が 13 項目中、「思う」群が 90%以上の割合のものは、＜子どもの存在に支えられている（100%）＞、＜子どもが明るく生活を楽しんでいる姿に励まされている（96%）＞、＜子どものために、つらい治療にも前向きに立ち向かいたいと思う（96%）＞、＜自分が親であるという意識に支えられている（94%）＞であった。一部の項目において属性は性別、相談者の有無、診断からの年数、ステージに有意な関係がみられた。

以上より、看護者は親ががんになったことで抱く罪悪感や無価値の思いを理解し、患者の家族背景や子どもに対する思いに対して十分に傾聴し、親役割を遂行できるように支援することが重要だと示唆された。

2）がん治療中の親が子どもとの関係において抱く困難と希望の具体的なエピソードを明らかにする

全国がん診療連携拠点病院にてがん治療中の患者 5 名に聞き取り調査を行った。参加者は女性 4 名、男性 1 名で、年代は 30 代が 2 名、40 代が 3 名であった。がんのステージはⅢ、治療は化学療法であった。子どもは小学生、中学生の順に多かった。

がん治療中の親の困難と希望[4]について、表 2・3 に示す。がん治療中の親は、親役割の遂行が出来ず子どもに負担をかけていると困難を抱いていた。一方では、子どもが存在価値を取り戻してくれる重要な存在で治療の支えであった。そのため、がん治療中の親の困難を十分理解し、希望を支えられるような支援が重要であると示唆された。

表 2：がん治療中の親の困難

カテゴリー	サブカテゴリー
自分のせいで子どもに負担を与えていること	自分のせいで子どもに余計な心配をかける
	自分のせいで子どもの行動に影響を与える
	自分のせいで子どもが頑張っていることをつらく感じる
治療によりいつも通りの生活が出来なくなること	いつも通りに親らしいことを出来ずつらい
	入院により子どもと離れることが心配
子どもとの心の距離が離れてしまうこと	副作用により子どもを相手に出来なくなった
	子どもとの関係に影響した
	入院により子どもと心の距離が出来てしまう
	子どもへの自分の気持ちの持ちように悩んだ
子どもにとってよくない状況を想像してつらい	子どもにとってよくない状況を想像してつらい
子どもにとって良い親でいられないこと	「がんである親」ではいたくない
	子どもの望みを実現できない
子どもの将来への不安	子どもの将来を考え心配になってしまう
	自分が死んだら収入が減り、子どもがどうなるか不安になる
	子どもへの遺伝の心配がある
	子どもに自分のがんを伝えるのが難しい

表 3：がん治療中の親の希望

カテゴリー	サブカテゴリー
親としての在り方が治療に向かう気持ちを支える	親としての在り方が気持ちを奮い立たせている
	子どものために気持ちを強くもたなければいけない
	子どもの存在が困難を乗り越える気力になっている
子どもを育てる責任感を感じること	子どものためにいつも通りにすごさないといけない
	子どもにはなんでもできる子どもになってほしい
	子どもを守るため、私が必要だと思う
	子どもが大きくなるまでは死ねない
	子どもに残せることはやろうという気持ち
子どもと日常生活を過ごすこと	日常の子どもの成長や活躍に希望と喜びを感じる
	子どもからの励ましや子どもとの何気ない日常から力をもらっている
子どもの成長を感じること	入院中の生活で子どもが手伝ってくれた
	自分の病気のために子どもがつらい思いをするが、子どもの成長になっているとも思う
	子どもは何もできないと思っていたが、子どもなりに考え受け入れてくれた
子どもが自分の存在価値を取り戻してくれること	子どもが自分の存在価値を取り戻してくれること

３）がん治療中の父親への多職種共同支援の開発をする

本研究の目的は、がんになった父親への多職種共同支援の開発である。研究 1）2）では、がん治療中の親の困難と希望について全国質問紙調査と聞き取り調査を行い、親は親役割を実感することにより、存在価値を高める希望があることが明らかになった。そのため、がん治療中の親に対する支援で重要なことは、親の思いを傾聴すること、親同士が日常の子どもの成長や活躍に希望と喜びを感じられるような対話を促すことと考えられた。

研究者は、がんの親をもつ子どものサポートグループ CLIMB®プログラム [5] を開催している。このプログラムでは、子どもは気持ちを表現する方法を工作をとして学び、親のがんについて知る。その間、親は別室で医療者を交えた自由な話し合い「親の会」を行う。前述の示唆より、親の会においても子どもの成長や親の希望に目を向けた対話に重きを置いた支援を取り入れることとし、2019 年 8 月と 2020 年 3 月に企画をした。

2019 年 8 月の CLIMB プログラム親の会では、緩和ケア医師、臨床心理士、がん看護専門看護師等の多職種と共に担当し、希望を引き出せるような対話を目指し、親の会での介入効果の仮調査のために、QOL と心理的不安について尺度を用いて仮の質問紙調査を行った。しかしながら、プログラムへの参加の患者は全て母親であり、父親のデータはとることが出来なかった。また、仮調査後の 2020 年 3 月のプログラムについては、新型コロナウイルス感染症の影響により開催中止となった。

本研究では、研究 1）2）で導かれた多職種共同支援の開発が出来たが、対象である父親への支援を実施することができなかったが、重要な支援体制が構築できたと考えている。今後は、開発した関わりについて、実施および評価をしてく必要がある。

＜引用文献＞

1. Inoue I, Higashi T, et al.: A national profile of the impact of parental cancer on their children in Japan. Cancer Epidemiology 39: 838-841, 2015
2. Semple CJ, McCance T: Parents’ experience of cancer who have young children: a literature review. Cancer Nursing 33: 110-8, 2010
3. 阿部祐子，眞壁幸子，安藤秀明，伊藤登茂子：がんになった親（18 歳未満の子どもをもつ）の困難と希望に関する文献検討．秋田大学保健学専攻紀要　25：61-69，2017
4. 赤川祐子，眞壁幸子，伊藤登茂子，安藤秀明：がん治療中の親が子どもとの関わりにおいて抱く困難と希望～親の語りに焦点を当てて～．　第 50 回日本看護協会論文集, 147-150, 2020
5. NPO 法人 Hope Tree：子どものサポートプログラム CLIMB（オンライン），入手先＜https://hope-tree.jp/program/climb/＞（参照 2020-05-10）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 赤川祐子、眞壁幸子、利緑、伊藤登茂子、安藤秀明	４．巻 49
２．論文標題 がんの親をもつ子どもへの支援～CLIMBプログラムアシスタント養成講座の教育効果～	５．発行年 2018年
３．雑誌名 第49回日本看護協会論文集ヘルスプロモーション	６．最初と最後の頁 95-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 阿部祐子，眞壁幸子，安藤秀明，伊藤登茂子	４．巻 25
２．論文標題 がんになった親（18歳未満の子どもをもつ）の困難と希望に関する文献検討	５．発行年 2017年
３．雑誌名 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要	６．最初と最後の頁 61-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 赤川祐子，眞壁幸子，伊藤登茂子，安藤秀明	４．巻 50
２．論文標題 がん治療中の親の困難と希望～親の思いに焦点を当てて～	５．発行年 2020年
３．雑誌名 第50回日本看護協会学術集会ヘルスプロモーション	６．最初と最後の頁 147-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Yuko Akagawa
２．発表標題 Hope and difficulty in parents under diagnosed with cancer
３．学会等名 第22回EAFONS（国際学会）
４．発表年 2018年～2019年

１．発表者名 赤川祐子
２．発表標題 がんの親とその子どもへの支援～秋田CLIMBプログラムを開催して～
３．学会等名 第23回日本緩和医療学会学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 赤川祐子
２．発表標題 がんの親をもつ子どもへの支援～CLIMBプログラムアシスタント養成講座の教育効果～
３．学会等名 第49回日本看護協会学術集会－ヘルスプロモーションー
４．発表年 2018年

１．発表者名 赤川祐子
２．発表標題 A県におけるがんになった親の18歳未満の子どもに対する看護師の支援の認識と現状
３．学会等名 第32回日本がん看護学会学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuko Akagawa, Airi Kataoka, Sachiko Makabe, Tomoko Ito, Hideaki Andoh
２．発表標題 “Challenge” in which parents having cancer tell their children about their cancer: literature review
３．学会等名 第23回EAFONS（国際学会）
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 Yuko Akagawa, Kaori Osawa, Sachiko Makabe, Tomoko Ito, Hideaki Andoh, Sue P. Heiney
２．発表標題 Effects of a support program for the parents with cancer diagnosis and their children ～CLIMB program～
３．学会等名 The 6th International Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 赤川祐子，眞壁幸子，伊藤登茂子，安藤秀明
２．発表標題 がん治療中の親の困難と希望～親の思いに焦点を当てて～
３．学会等名 第50回日本看護協会学術集会ヘルスプロモーション
４．発表年 2019年～2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考